

アンサンブル ディマンシュ

第 84 回演奏会

2019 年 2 月 9 日 (土)

彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



【プログラム】

モーツァルト 歌劇「劇場支配人」K.496 序曲

シューベルト 交響曲第2番 変ロ長調 D.125

第 1 楽章:Largo - Allegro vivace

第 2 楽章:Andante

第 3 楽章:Allegro vivace

第 4 楽章:Presto vivace

♪ 休憩 ♪

ビゼー 交響曲第 1 番 ハ長調

第 1 楽章:Allegro vivo

第 2 楽章:Adagio

第 3 楽章:Allegro vivace

第 4 楽章:Allegro vivace

【プロフィール】

指揮 平林 遼



1988年東京生まれ。

2011年、東京音楽大学指揮科を卒業。同大学にて指揮を広上淳一氏に師事。また、在学期間中に、井上道義氏にも師事。

2014年ロリン・マゼール氏審査の選考を経て、マエストロ・マゼール・マスタークラスに招待される。氏の邸宅にて、直接、指導・薫陶を受ける。この期間中に病により逝去された氏の、最後の弟子の一人となる。

2015年8月、ベートーヴェン・コンプリート・シンフォニー・マスタークラス&コンペティション(イギリス)にて、オーケストラ団員の投票により2位。

2015年夏、200通以上の応募から、8名の選抜生の内の1人として、ムーティ氏審査の、リッカルド・ムーティ・イタリアン・オペラ・アカデミー最終選考に招聘される。ムーティ氏とのやり取りや、氏のリハーサル見学等を通じ、同アカデミー内で学ぶ。

欧州留学のため2015年始めから2017年始めまでベルリン在住。その間、オーケストラ・ジョヴァンニ・ルイーギ・ケルビーニ(イタリア)、ノース・チェコ・フィルハーモニック(チェコ)、ボフスラフ・マルティヌー・オーケストラ(チェコ)、ロイヤル・カメラータ・オーケストラ(ルーマニア)等、ヨーロッパ各地のプロ・オーケストラを指揮。

これまでにザルツブルク・チェンバー・ソロイスツ(オーストリア)、ベルリン・シンフォニエッタ(ドイツ)、アルゴヴィア・フィルハーモニック(スイス)、カダケス・オーケストラ(スペイン)、キャスルトン・フェスティヴァル・オーケストラ(アメリカ)等を指揮。日本国内においても、プロ団体を含む多くのオーケストラ・合唱団・オペラ公演等を指揮。

その他、クリスティアン・エーヴァルト、コリン・メッタース、ケネス・キースラー等各氏に師事。

【曲目解説】

～若くして逝った天才作曲家たちの作品～

今回は、30代で惜しまれながらこの世を去った3人の天才作曲家、モーツァルト、シューベルト、ビゼーの作品を取り上げます。

「神童」と呼ばれるモーツァルトは、1791年に35歳という若さで亡くなっていますが、その短い生涯に600以上の作品を残しています。死因は感染症と言われていますが、毒殺説など異説も多くあります。

「歌曲王」シューベルトは、モーツァルトよりも更に若い31歳で1828年に亡くなっています。「リート」と呼ばれる独唱用の歌曲だけでも、3つの歌曲集の歌曲を含めると600曲以上残しています。彼の死因も、腸チフス説、治療に伴う水銀中毒説など諸説あります。

歌劇「カルメン」の作曲者ビゼーが亡くなったのは、1875年36歳で、死因は疾患に伴う心臓発作だと言われています。9歳でパリ音楽院に入学を許されるほどの天才ですが、作曲家としての名声を得たのは死後のことのようにです。

モーツァルト 歌劇「劇場支配人」K486 序曲 ハ長調 (1786年)

そうです。土曜日の朝、『題名のない音楽会』がはじまると聞こえてくるテーマ曲がこの曲です。

1786年、モーツァルト30歳の円熟期。前年から歌劇「フィガロの結婚」の作曲に取り組んでいたところへ皇帝ヨーゼフ2世より一幕のドイツ語喜劇「劇場支配人」の台本が渡され、作曲を依頼されました。

《喜劇の内容》支配人と喜劇役者が演目や配役について打ち合わせをしていると、役者たちが次々に売り込みに現れます。スポンサーである銀行家もお気に入りの女優を連れてきます。悲劇女優も俳優も売り込みに来て芝居や得意芸を披露します。そして歌手たちもやってきます。

想像が付き易い展開ですね。そうです、皆さん譲らないまま歌手のオーディションがはじまります。

冒頭の「序曲」以後、ここまでのやりとりが30分、音楽はなにもありません。ここでやっとモーツァルトの音楽が再開されます。アリアが4曲と数は少ないのですがさすがモーツァルト、アリアの醍醐味をたっぷり味わうことができます。

二人のソプラノが「アリエッタ」と「ロンド」で競います、二人は譲りません。

テノールが仲裁に入り、三人で三重唱「私がプリマ・ドンナよ！」と歌い、最後は男性俳優が加わって4人で「芸術家は誰も栄光を求めて努力する」を歌います。「芸術のために調和が大切だ、みんなで力を合わせよう」と四重唱で歌い終幕。

この作品は作曲された年の初演以降、構成の特殊さからほとんど上演されることはありませんが、「序曲」だけは単独で演奏されるレパートリーになっています。

同時期に作曲された「フィガロの結婚」序曲同様、プレストで快活に走りきり、十分に美しく充実したこの序曲。このプレストは、支配人が汗を飛ばしながら焦っている風情ではなく、喜劇の内容に物足りなかった当時のモーツァルトの心意気でしょうか。いずれにせよ、当時の円熟モーツァルトが素直に溢れ出ている一曲であることを感じさせられます。

(たい焼き)

シューベルト 交響曲第2番 変ロ長調 D.125 (1815年)

この曲はシューベルトが18歳の時の作品です。1楽章の冒頭はモーツァルトの交響曲39番を、その後のアレグロはベートーヴェンの「プロメテウスの創造物」序曲を、2楽章はベートーヴェンの「ハ長調のロンド」作品51-1を、それぞれ連想させ、また3楽章はハイドン風と言われています。

シューベルトの経歴を振り返ると、8歳でバイオリンとピアノを始め、11歳(1808年)で宮廷礼拝堂付き少年合唱団(現ウィーン少年合唱団)への入団と同時に、帝室王立寄宿制学校(シュタット・コンビクト)へ入学します。13歳の時にはコンビクトのオーケストラのリーダーとなり、作曲などをサリエリから学びます。ただサリエリの教えには共感しなかったようで、当時のコンビクトが集めたであろうハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン等の音楽を楽しみ、楽譜の研究をしていたようです。その後、声変わりのため、16歳でコンビクトをやめ、父の学校経営を手伝う目的から教員養成学校で1年間すごした後、1814年17歳で新米教師として働き始めますが、この頃から作曲も多くを手がけるようになります。

今風に言えば、小学5年から中学3年まで音楽学校で勉強し、17歳で働き始めたけれどもやっぱり作曲がしたくて、いろいろ試して作った曲がこの第2交響曲と言うところでしょうか。1815年という年には、「野ばら」や「魔王」などの傑作を含め145曲もの歌曲を作曲しています。交響曲2番もシューベルトの特長である転調の美しさが何とも見事です。

シューベルトの交響曲の人気ランキング(某HPによる)では、1位:7番(未完成)、2位:5番、3位:8番(グレート)、4位:4番(悲劇的)、5位:6番・・で、2番と言うのは誰も知らない?!。当団の選曲会議で曲も知らずに同意した1st Violin族は、悲劇的な練習が要求される曲であるということを理解しました。

当時の時代背景では、あのナポレオン率いる革命フランス軍に2度(1805年と1809年)も占領されたウィーンの人々には、今を出来るだけ気楽に生きようとする姿勢が生まれ、「状況は悲劇的であるが、深刻ではない!!」という人生観も生まれたようです。我が1st Violin族の状況は悲劇的で、かつ深刻ですが、何とかシューベルトらしさをお届けすべく、かのウィーンの人々が1813年には同盟軍ながらナポレオンに勝利したように、ディマンシュ同盟軍として音楽をお届け出来ればと思います。

(お父さん)

ビゼー 交響曲第1番 ハ長調 (1855年)

ジョルジュ・ビゼーは1838年パリに生まれました。父親が声楽教師、母親がピアニストという音楽家庭で育ったビゼーは、なんと9歳でパリ音楽院に入学します。日本で言うと小学校3年生で藝大に入ったようなものです。1855年音楽院時代、ビゼーが17歳の時に交響曲1番は作られました。彼にとって習作的な作品と言われていますが、若々しく勢いがありながらフランスの色彩豊かな音使い、抒情的な旋律がちりばめられたこの作品は、36歳で早逝した天才のみが書き得た逸品として高い評価を得ています。しかしこの作品はビゼーの生前には演奏されず、初演されたのは作曲後80年も経った1935年でした。パリ音楽院の図書館に埋もれていたこの曲の総譜が発見されて初演のはこびとなり、好評を博したのです。今回のチラシの写真は楽譜が見つかったパリ音楽院の図書館です。とても風情があり、他にも埋もれている楽譜があるのでは、とってしまいますね。

ビゼーは歌劇「カルメン」や「アルルの女」などの劇音楽が有名です。心情を揺さぶるメロディックで美しい旋律、その情景が目浮かぶような音楽で楽しませてくれます。今回指揮者からは「交響曲の枠を越えた曲」「オペラ歌手のように歌って！」と指導がありました。交響曲というより劇中の4つの情景音楽として聴いていただければと思います。

第1楽章 Allegro vivo

快活なハ長調の第一主題が始まります。第二主題は木管楽器がのびのびと歌います。若々しい旋律と早めのテンポは自転車で風を切って走るような爽やかさがあります

第2楽章 Adagio

オーボエがメランコリックな息の長い旋律を歌います。実は2本のオーボエが交互に吹いていて長い旋律が途切れなくなっています。弦に受け継がれた旋律はまさにオペラのアリアのような美しさです。弦の古典的なカノンを含み、オーボエの主旋律が戻って静かに終わります。

第3楽章 Allegro vivace

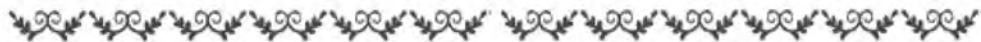
3拍子のこの楽章はフランスの片田舎のお祭りのようです。民族衣装に身を包んだ住民が手をとって輪になりながら踊っている風景が浮かびます。そこに突然弦楽器によるオルガンのような和音が鳴り響き木管楽器が奏でるバグパイプ隊がやってきます。楽しい楽章です。

第4楽章 Allegro vivace

第1ヴァイオリンが細かいパッセージをととても速いテンポで弾きだします。無窮動的な旋律は続きながら、様々な優美な旋律が絶妙に絡まり曲に輝きと深みを与えています。

17歳でこのような交響曲を書いたビゼー、もっと長生きをしていたなら素晴らしい音楽をどんなに沢山残したことでしょう。今回は17歳のトリプルスコアかそれ以上の私たちが17歳のビゼーに挑みます。最後まで若々しく輝きのある演奏ができますように。

(ビゼーをずっと吹きたかったオーボエ奏者 A)



【第84回メンバー】

第1ヴァイオリン	佐藤克哉、三瓶政一、☆時山響子、西川富之、西村 実
第2ヴァイオリン	石嶺寿子、関根佳子、林 俊夫、望月あゆみ、♪森 未知
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口 彰
チェロ	工内智恵、中山憲一、三次摂子、♪米倉俊郎
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮
フルート	谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	市川亜理、山口高司
クラリネット	浅井昭成、鈴木千暁
ファゴット	越島康太郎、星野未央、吉澤輝彦
ホルン	尾形武一、小磯 治、新村智子、町田明子、吉井由希子
トランペット	鴨狩公一、藺部晴信
ティンパニ	星野武徳
	☆:コンサートマスター、♪:弦楽トップ
練習指揮	山上孝秋
トレーナー	戸澤哲夫(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)

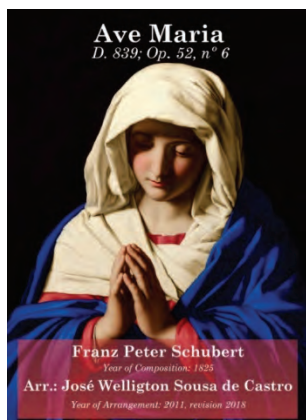


♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2019年9月22日(日) 14:30 開演予定
場所：タワーホール船堀 大ホール
指揮：平林 遼
曲目：シューベルト：イタリア風序曲第1番 二長調 D590
モーツァルト：交響曲第35番 二長調 K.385「ハフナー」(第2稿)
ベートーヴェン：交響曲第2番 二長調 Op.36

詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。
※招待券ご希望の方はアンケートにご記入いただくか HP よりお申込みください。

本日のアンコールについて



本日のアンコールは、

シューベルト：アヴェ・マリア作品 52-6

（歌曲集「湖上の美人」作品 52～第6曲「エレンの歌第3番」）です。

原曲は歌曲ですが、ブラジルの作曲家ソウサ・デ・カストロの管弦楽編曲版を基にアンサンブル ディマンシュ用に再編しました。

【 追 悼 】

去る1月11日、アンサンブル ディマンシュのメンバーでホルン奏者の 小磯 治 君が急逝しました。

同君は、長年にわたり奏者として、また、運営委員として当団に尽力してきました。当演奏会にも出演する予定でしたが、残念ながらその思いを果たせず天国に旅立ってしまいました。

本日のアンコール演奏では、チューブラー・ベル（鐘の音）を加えて哀悼の意を表しました。

